

Title	発達障害者の語りから：オルタナティブな「当事者」性に向けて
Sub Title	Narratives of hattatsu shogaisha: toward an alternative tojisha-ness
Author	照山, 絢子(Teruyama, Junko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2011
Jtitle	哲學 No.125 (2011. 3) ,p.313- 338
JaLC DOI	
Abstract	Tojisha, literally translated as "those who are concerned," has been a key mobilizing concept in Japanese disability rights movement since the 1970s by defining and shaping the identity and agency of the disabled population as a collective group. Despite the criticism for its exclusive nature and its failure to account for the diversity and complexity by which membership to the community is granted / claimed, it was under the banner of tojisha that the disabled community came together and fought against oppression and discrimination to claim their rights. However, turning to hattatsu shogaisha or people with developmental disabilities (including LD, ADHD and high-functioning autism), we realize that the notion of tojisha is undergoing transition among this newly emerging group of disabled individuals. Their narratives lack the political orientation and will for active engagement in social changes that were prevalent in previous movements, and are instead characterized by a recessive tone of withdrawal into the personal realm of experience. In this paper, I closely examine the narratives of three individuals with hattatsu shogai that I interviewed over the past two years, and argue that tojisha-ness for these individuals is no longer a concept to bring people together for a collective activist project, but has evolved into a concept that indicates the dispersed yet shared experience of struggle to carve out one's positionality in society, despite various disabilities or differences.
Notes	特集：人間科学 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000125-0313

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投 稿 論 文 —

発達障害者の語りから： オルタナティブな「当事者」性に向けて

— 照 山 絢 子* —

Narratives of *Hattatsu Shogaisha*: Toward an alternative *tojisha*-ness

Junko Teruyama

Tojisha, literally translated as “those who are concerned,” has been a key mobilizing concept in Japanese disability rights movement since the 1970s by defining and shaping the identity and agency of the disabled population as a collective group. Despite the criticism for its exclusive nature and its failure to account for the diversity and complexity by which membership to the community is granted / claimed, it was under the banner of *tojisha* that the disabled community came together and fought against oppression and discrimination to claim their rights. However, turning to *hattatsu shogaisha* or people with developmental disabilities (including LD, ADHD and high-functioning autism), we realize that the notion of *tojisha* is undergoing transition among this newly emerging group of disabled individuals. Their narratives lack the political orientation and will for active engagement in social changes that were prevalent in previous movements, and are instead characterized by a recessive tone of withdrawal into the personal realm of experience. In this paper, I closely examine the narratives of three individuals with *hattatsu shogai* that I interviewed over the past two years, and argue that *tojisha*-ness for these individuals is no longer a concept to bring people together for a collective activist project, but has evolved into a concept that indicates the dispersed yet shared experience of struggle to carve out one’s positionality in society, despite various disabilities or differences.

* ミシガン大学大学院博士課程

はじめに

1970年代以後、障害者の解放と自立を目指して展開されてきた日本の障害者運動において、当事者性とはまさに「健常者」と相対して当事者の権利を奪回していくための基軸となる概念であった(杉野2007)(中西・上野2003)。それは、政治的な目的を達成するための概念であるがゆえにドグマティックであり、今日に至るまで障害者運動を牽引して多くの変革を社会にもたらしてきたものである一方、実際の当事者性の複雑さを括弧入れして、単純かつ一枚岩的なものとして描いてきたという功罪がある。即ち、第一に当事者と非当事者との間の境界を明確に引くことによって、そのどちらにも当てはまらない人、あるいは「グレーゾーン」といわれる人々を不可視の存在としてしまったこと、第二に当事者同士の間の障害の種類や程度等の差異を過小評価することによって、障害者の中で多様性に対する理解を促進しなかったこと、そして第三に、女性や民族的なマイノリティなど、当事者の内なるマイノリティを十分に認知せず、場合によっては二重の抑圧構造を作り上げてしまったこと、等が問題としてあげられる(豊田1998)。豊田は、このような歪んだ当事者幻想を解体していった先に、障害者の置かれている状況を「社会全体の問題として浮上」させ、社会の成員が、障害の有無にかかわらず自分の置かれている社会のこととして、広義の当事者性を以て問題に取り組めるような社会を想定している。

一方、上のような批判が提出された頃にはまだほとんど認知度がなく、その後急速に広く一般に知られるようになった発達障害¹を持つ人々の語りを見ていくと、豊田が描いていたような「当事者」像とはまた少し異なる

¹ 平成16年の発達障害者支援法において、発達障害とは「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるものをいう」と定義されている。

る自己像が浮かび上がってくる。まず、発達障害は、これまで障害児教育や障害者福祉の対象にはなっておらず、学校や職場で「ちょっと変わった人」と思われてきた人々の障害である、という言葉とともに台頭してきた(磯部 2005)。この点において、彼らは従来の障害者運動の「当事者」性の枠の内側にいるとも外側にいるともつかない、いわばその中間圏の存在であるといえる。そして次に、発達障害に含まれる学習障害、注意欠陥・多動性障害、高機能自閉症などはそれぞれに異なる症状があり、日常生活を送るうえでの困難さも違えば、支援のニーズも違う。また、これらの障害を少しずつ重複して持っている人もあり、「発達障害」と一口に言ってもその多様性は計り知れず、障害名ではなくて個を見るという視点を失ってはならないと、特別支援教育の場などでも頻繁に言われている。したがって発達障害者の多様性についての理解は、当事者と呼ばれる人々の間では十分に共有されているといえる。第三に、発達障害者の連帯による運動というのは、さほど多くはないという実態がある。現在の成人の発達障害者の活動は、個人的な日常生活の中での生きづらさに関する情報発信・情報共有を主としており、困っていることに関して相互にアドバイスをしたりするようなことはあれど、強い結束力のもとに連帯して行動するためのめだった活動はない。したがって、コミュニティの傾向としては極めて個人プレイ的であり、マジョリティ・マイノリティといった内なる政治性も顕著には表れていないといえる。

このような点を見ていくと、発達障害者の当事者性は豊田(1998)が提起しているような「当事者」と「非当事者」の二項対立的構図を想定することに伴う先述のようなさまざまな問題を回避しているように思われる。彼らが当事者という立場から出版しているものを見ても、社会運動につながるような政治的色彩が希薄で、ほかの障害者との連帯感や共有感もさほど強くはなく、「自分語り」ともいえるようなきわめて主観的で個人的な体験を主軸としている(ニキ、藤家 2004)(綾屋、熊谷 2008)(高森、

他 2008). 発達障害者の語りに見られるこのような流れは、豊田(1998)が提唱するような、誰もが社会問題に対して主体的な関わりを持つような広義の当事者性の実現への第一歩なのであろうか。それとも障害があることに伴う生きづらさを、「私が解決すべき私の問題」という個のレベルにまで縮小させ、外部に対して問題提起や告発をする力を失ってしまった最小単位の当事者性のかたちなのだろうか。

本稿においては、成人している発達障害者三名へのインタビュー内容を手がかりとして、発達障害者がどのようにその障害を意味づけながら、他者と関わり、社会の中で自身を位置づけているかを考察していくことで、発達障害者の「当事者」性の質的な描写を試みる。インタビューはいずれも2008年から2009年の間のもので、二時間から四時間程度にわたって調査者である私と一対一の対話形式で行われた。話題のきっかけとして用意された質問はあったが、基本的には「発達障害者としてのパーソナルヒストリーを聞かせてください」という問いかけに対して、回答者が自由に語ったものである。三つのケースを以て発達障害者全体に対して語ることはできないし、またここで取り上げている三名が発達障害者の典型例だと言うつもりもないが、この三名がそれぞれの個人史の文脈の中で特に力点を置いて語った柱となる話題を中心にみていくことで、各人の経験の個別具体性を超えて、発達障害者の間で一定の普遍性をもって共有されている障害観や「当事者」観が透けて見えるところがある。本稿では、取り上げる三名が語っている個人的な物語を丹念に追っていくことで、その向こう側にあるより概念的で集合的な「当事者」像を炙り出すことを目指す。

なお、現在成人している発達障害者のほとんどは、発達障害に対する教育現場の理解があまりなかったころに学齢期を過ごしているため、特に支援などを得ることなく成人して、後にメディア等さまざまな情報源から発達障害について初めて知り、自ら求めて診断を得るに至った、いわゆる「中途診断者」と呼ばれる人々である。教育の現場では2007年に特別支

援教育が施行され、現在学齢期にある発達障害児の多くは早期に診断を得て、まだ不十分ながらも徐々に整備されつつあるさまざまな支援を受けながら通学している。こうした発達障害児の支援制度の整備については親の会など家族のイニシアチブに拠るところが大きく、家族の関わりや本人の障害観、学校における経験など、さまざまな面で現在の「中途診断者」とはだいぶ異なっている。あと十年も経てば、こうした早期から支援を受けてきた世代が成人し、発達障害者の「当事者」性も質的に大きく変化することが予想されるため、主に中途診断者によって構成されている現在の成人発達障害者のおかれている状況や語りは過度的なものであるとみることもできる。が、発達障害の概念がまだ固定されておらず流動的で、社会的な認知も（長らく当事者運動を展開してきた他の障害と比べると）比較的低い現在だからこそ、発達障害者の語りは既存の型に捉われず、今後の示唆に富むものとみることできる。

ケース 1: 「できない」ということの意味について (A さん・30 代・女性)

成人発達障害者に、「当事者」意識の芽生えについて話してもらうとき、学生時代に勉強ができなかった、人とうまく関わるができなかった、周りの人にはできることが自分にはできなかった、というエピソードが多く挙げられる。こうした「できなさ」がどのように想起され、意味づけられているのかをまずは見ていきたい。

語り手である現在 30 代の女性 A さんは高校在学中から美容師を志していたが、国家資格の試験になかなか受からず、途中でイギリスの大学へ進学して美術を学び、帰国してからも美容師を目指し続けていた。が、それでも受からなかったために、外資系企業の事務職などを転々としてきた。

「美容師のテストに受からないんですよ。美容師っていうのは資格が必

要なんですね。通信教育で高校の二年生のころからはじめていて、二年間かかったんだけど、一年目は美容室で働きながらやって、通信を卒業しても国家資格をとらないといけないんだけど、それが受からないんです。実技で髪を切ったり、筆記があったり。全然受からないんですよ。たまたま落ちる人でも二回受ければ受かるって言われてて、でも五回も受けても受からないので、実はもう呆れちゃったんですね。半年に一回しかないで、それでイギリスに留学して、帰ってきてからもやっぱりまたチャレンジしたんですよ。実質二年半とはいってもやっぱり頭の中で受かりたい、受かりたいって思ってたのは六年間ぐらい。帰ってきてからも資格があったほうが収入につながるし、ないと美容室でも雇ってくれなくなってきちゃってるんで、最近、それで帰ってきてからも頑張ってたテスト受けたりしてたんだけどおこっちゃうの…。悔しかったけど一回方向転換して、ヘアはあくまでもアレンジでやっていければと思ったんですけど。」

Aさんは、イギリスに行っている期間中に、現地の大学の学習支援センターで学習障害を疑われ、検査を受けてディスレクシア（読み書き障害）であることがわかっている。診断を受けてから、美容師になるための試験に落ち続けたのはディスレクシアがあったためであったという理解に至ったが、それまではなぜ受からないのかがわからず、あまりの回数に「呆れちゃった」のだという。Aさんにとってはこの時の経験が、人と同じことができない、と感じる原体験となっている。イギリスから帰国し、美容師の道を断念して企業で働くことを選んだときも、こうした「できなさ」をめぐる葛藤は続く。

「お金稼げるっていったら英語がちょっとできるぐらいしかなかったので、てっとりばやく、外資系で事務したりして、でも間違うからクビになっちゃって。仕事としては、商品番号あるじゃないですか。そういうの

をアシスタントとして500個ぐらい打つ仕事をして、この番号の商品を探してくださいって。でも間違えて違う商品がでてきちゃう。なんでこんな簡単なことができないんだってすごい叱られて。採用のときには（発達障害があるということは）言わなかったです。逆にこういうのすごい得意なんです。って言ってた。わたし間違えます。って言ったら誰も採らないじゃないですか。よくないなとは思いますが、生きていくのには嘘ついちゃったっていうか。（中略）（上司が）責めるんですよね。そのころ私は仕事見つかってクビになって、また見つけてクビになって…って。一番つらかったんですけど。やっぱり、なんでこんな簡単なことが！って。私は言わなかったし、とにかく自分はひとりで苦しむしかないと思ってた時期なんで、自分でもどうしてこんなに間違うんだらうって悲しい時期があったんだけど。だから確かめないんだよ君は、って言われて、そうか確かめてないんだなと思って、でも確かめても見過ごしてるんですよね。間違っていないと思って書いた数字だから、見過ごすに決まってるんですよ。（笑）そういう書類チェックしてもともと向いてないとは思いますが、でもつらかったね…できるまで帰らなくていいとかいじめる人もいて。はい、じゃあ頑張ります、残業代になるから頑張ろうって前向きに考えるんですけど、どこが間違えたかわからないんだもん。アルファベットとか数字とかが二つ以上並んでるのがすごく苦手。あと、改行の間がないとかね。」

学習障害、中でもディスレクシアのある人は、意味のある文章などであっても誤読や読み飛ばしが多く、文字を大きく印刷したり前後の行を隠したりするなどの工夫を凝らさないと読み書きに支障を伴うため、商品番号などの無意味な文字や数字の羅列を写すとなってはなおさら、その困難は想像に難くない。このような業務はまさに「ディスレクシアらしさ」が最も顕著にあらわれるところであろう。Aさんはいくつか外資系の企業を渡り歩いており、すべての企業で商品番号の入力のみをしていたとは

考えにくいですが、診断を得た後の仕事における「できなさ」の語りは、それ以前の美容師の試験に落ち続けたエピソードに比べてより具体的で、Aさん自身の障害特性に関する理解に根差したものとなっている。

また、なかなかうまくできない入力作業を、「こんな簡単なこと」と言われたことにもたびたび触れている。決して難しい仕事ではなく、誰にでもできる簡単なはずのことだった、ということが「できなさ」に対するAさん自身の違和感と焦燥感につながっており、「自分でもどうしてこんなに間違ふんだらうって」悲しくなったという。周囲から見た本人の「できなさ」を、無批判とも思われるほどまっすぐに受け止め、「できない」自分の自己否定につなげてしまうのは、Aさんに限らず発達障害者の語りに普遍的に見られるともいえる姿勢である。このとき、逆に「自分にできること」という基準から、上司等に対して「どうしてそんなに無理なことを言うのだらう」「どうしてそんなに難しいことを『簡単』だと言うのだらう」といった憤りや反感を抱いた、というような語りは極めて稀であるように思われる。Aさんの語りにあるように、「できなさ」とは、まずは上司など外在的な他者による評価に基づいており、それを内化してしまうことで、否定的な自己イメージにつながっている。

しかし、Aさんは診断を得た後に何年もかけて発達障害について学び、当事者として活動をしていく中で、この「できなさ」を「不得意なものがある」という局所的な評価に転化させている。読み書きや文字入力などが不得意である一方、美容・美術に関することや人と接することが得意で、現在はそういった得意な面を活かして平日は営業職として働き、休日はフリーランスでヘアアレンジとメイクの仕事を請け負ったり、自宅で料理教室を開いたりしている。

「ラッキーですよ、本当に。自分が何が得意で何が不得意かってことがわかってただけでも、すごく去年ぐらいから生き方が楽しくなって、失敗し

でもめげなくなつたし、前から明るかつたんですけど、強くなれたのは確かにあります。イギリスに行つてなかつたら、自分は落ちこぼれだと思つて人生を生きていたと思うので、イギリスに行つてディスレクシアかもしれないと大学で言われて、それはすごく良かったなと。日本ではまだ、自分は知恵遅れだとか思つてる人がいるので、そういう人を助けていかないと。」

最後の一文は、発達障害という概念そのものを普及させて、自身の発達障害に気づいていない人々に向けた啓発を行つていかなければならない、という意味が込められているが、「知恵遅れ」とはいうまでもなく知的障害者の俗称であり、Aさんが発達障害者という立場からこの文脈で「知恵遅れ」という言葉を使ったことの背景には、発達障害というものの実体と、他の障害との間の違いをめぐる、Aさん自身の（そして多くの発達障害者に共有されている）価値観がある。知的障害が広範囲にわたる知的機能の制約による障害であると考えられていることに対して、狭義の発達障害は全般的な知能の遅れがないのにも関わらず読み書きや社会性など特定の分野で限定的に表出する障害と理解されており、できることとできないこととの間の差が「でこぼこ」などと表現されている（杉山 2009）。Aさんにとって、自分の得意なことと不得意なことを理解し、それを意識しながら働いて生活をしていくことこそが、これまでのような悲しい思いをせずに自身の「できなさ」とつきあつていくための工夫なのである。そうした意味において、「自分は知恵遅れだとか思つてる人」というのは、自分の「できなさ」を得手不得手のような局所的なものだと考えることができず、知的機能全般にわたるものと捉えており、そうした人々に対して、異なる障害観を提示しなければならない、という考え方が読みとれる。Aさんはさらに、現在の日本社会での発達障害の受け取られ方について以下のように述べている。

「なんか暗くて重い感じになってしまうので、欧米で言っている、『はい、ディスレクシア』っていう、全然平気じゃん、っていう感じではないんですよ、発達障害だから普通の生活ができないとかそういう問題ではないから、ただ単に注意喚起みたいなものであって、たとえば辛いものが食べられないとかそのぐらいの感覚みたいだから、あっちの人（イギリスの人）にとっては、なんでそんなこと気にするのって逆に言われることもあったので、いわゆる『障害』っていう言葉でひとくくりにされているけれど、全然違うのであって、知恵遅れと難読症は全然違うから、そのへんで一緒にしてしまうのは非常にもったいないよね。」

上の引用の中には、知的障害と発達障害を一緒くたにすることを問題視する視点とともに、そういうことをしている日本社会を、イギリス社会と比べたうえで批判する視点が含まれている。Aさんの語りの中に登場するイギリスは、ディスレクシアが「障害」という言葉の重みを背負わず、せいぜい「辛いものが食べられないのでそこは配慮してください」という程度の注意喚起で済まされるような場所である。それは、社会の中での発達障害者の位置づけについてのオルタナティブな可能性を提示しており、また、さまざまな人が抱える多様な「できなさ」に対するもう一つの向き合い方をも提示している。Aさんは「イギリスでは」とインタビューの中で何度か繰り返してイギリスでのエピソードを出しているが、それはイギリス社会の特有性を指摘するものである以上に、発達障害者として日本は暮らしにくいのだという批判の基点としているように思われる。Aさんとのインタビューは、極めて個人的な「できなさ」に関する話題が中心で、これまで見てきたように彼女はその「できなさ」に伴う自己否定的な感情を「不得意なことがある」と転じることで乗り切ろうとしてきたが、同時にまた、「できなさ」が必要以上の摩擦を引き起こすような社会の在り方に対する問題意識も、垣間見えていた。

ケース 2: 診断と「らしさ」のポリティクス

(B さん・30 代・男性)

「子供のころから気づいてました。小学校一年生のときから文字に興味
がもてないとか、九九が覚えられないとか。親の仕事で小二から二年間
ニューヨークに行っていて、中二から一年間テキサスに行ってたんです。
読み書きを覚える時期に海外にいたからできないのかとずっと思ってたけ
ど、あるとき、自分よりも長く海外にいた人と出会って、でも不自由なく
読み書きができて、これはおかしいと思って。」

B さんは 30 代の男性で、帰国子女である。子供のころから読み書きが
周囲に比べてできないことに気づいていたが、上述のようにそれをアメリ
カに行っていたためだと本人は解釈していた。小学校四年でニューヨーク
から帰国したあとは、一時期一学年下のクラスに通学したり、校長室で個
別指導を受けたりしていたが、勉強に追いつくことができず苦しい毎日
だったという。中学に入ってから勉強もできずクラスメートとのコミュ
ニケーションもうまくいかず、「学校へは行っていたけれど、暗くて、い
じめ的なものもあって、今でいうひきこもりみたいな感じだった」と話し
ている。しかし、中学時代にテキサスに行ったときに状況は一転、診断こ
そなかったものの、学校のカウンセラーが B さんの状況に気づき、さま
ざまな支援を受けられるように配慮してくれたことで成績が急にあがっ
た。一緒に授業をとっている同級生が、カーボン紙にノートをとってコ
ピーのほうを B さんにくれ、それをファイリングするように言われてい
たほか、試験はリソースルームの教員が口頭で読み上げてくれていたとい
う。また、書くことが苦手な B さんにタイピングの勉強を勧められたり
、美術などの授業を多めに履修するような時間割を組んでくれたりもし
たそうだ。

「日本にはもう帰りたくないと思いました。小学校のころアメリカにいたから日本の学校の勉強が遅れてるのだと最初は思っていたので、中学ではもう（アメリカには）行きたくないと思ってたんだけど、また遅れてしまうかなって。でもいざ行ったらもう日本には帰りたくないと…。アメリカにいる時は成績が高くて、日本にいる時は成績の低い子だったんです。」

当初は、一度目の渡米が学習の遅れの原因だと思っていた B さんだが、二度目の渡米で期せずしてさまざまな支援を受け、成功体験を積むことができた。このときのカウンセラーがどのような思惑で彼のためにこのような支援体制を整えたのかはわからないが、この時点では彼に発達障害の疑いがあることは、学校側から彼の両親にも説明されていなかった。このとき日米で学校教育の中でまったく異なる評価を受けていた経験が、B さんにとってはその後の診断の意味を考える上で重要なものとなってくる。

彼が最終的に診断を得たのは、その後高校を卒業していったん社会に出てから社会人入学で大学に入学し、30代に入ってからのことである。睡眠障害やうつのような症状、人間関係のトラブルが多く、「パーソナリティ系の障害なのかもしれない」と自ら疑って精神科を受診したのだという。黒柳徹子の『窓際のトットちゃん』を読んで ADHD のことを知り、自分も子供のころにそうした傾向があったと話したところ、検査を受けることになり、PDD-NOS（特定不能の広汎性発達障害）との診断を得た。その後通院を続けるうちに、診断名は学習障害に変わっている。

B さんの場合は、テキサス州の中学校に在籍していた時期に、そうとは知らないまま充実した支援を受けていたため、「アメリカにいる時は成績が高く、日本にいる時は成績の低い子だった」という、周囲の彼に対する評価の乖離を説明するものとして、診断を位置付けている。当初は読み書きを学ぶ時期に海外にいたから勉強ができないのではないかと、帰国子女

であることで勉強の遅れを説明しようとしていたが、診断を得て発達障害について知るにつれて、テキサスの中学校で成績が良かったのは、いわゆる「支援」を受けていたからだと気づく。そして、アメリカでの優秀だった自分と、日本での落ちこぼれだった自分という自身の二つの側面を、支援を受けていた時期と受けていなかった時期に重ね合わせることで適切な支援の意義を確認すると同時に、それらを提供してくれたアメリカと提供してくれなかった日本という二つの文化と制度の違いに関する理解とも重ね合わせている。

「最近日本では KY とか言って、少しでもアスペっぽいとすぐアスペって言われますよね。ADHD でも空気読めないとか。でも文化の違いっていうのもあるのかなって。日本では自分はアスペっぽいと思うけど、アメリカにいたときはそういうふうには思ったことないです。時間に厳しいとか、文化や国によってありますよね。日本だと、履歴書は手書きじゃなきゃいけないっていうけど、5枚以上書き損じて、1枚ちゃんとしたのを書くのに3日以上かかるんですよ。でも手で書いて文字がきれいとか見るじゃないですか、日本は。(中略)アメリカは概して日本よりもはっきり物を言うし、自分が外国人なので余計にはっきり説明してくれたりして、コミュニケーションのトラブルも少なかったです。」

履歴書を手書きで書くのに時間がかかるのは、Bさんが読み書きに困難があるためである。よく聞いてみると、英語のほうが綴りから音声化した言葉を連想することが難しく、日本語よりも読み書きにさらに時間がかかるそうだが、日本語と英語の読み書きにあたってのそうした技術的な違いよりも、どういった文脈で読み書きを行い、またその習熟度が社会的にどういった意味を持つかという点において生起する「文化の違い」のほうに、実生活の困難さに直接結び付くものだとBさんは考えている。パソ

コンを使いこなすことができる B さんにとっては、あらかじめパソコンで作成した履歴書を印刷して就職活動をすることができれば何社も受けることができるが、一枚ずつ手書きで書かなければならないとすると、一社分を書くのに大変な時間を要する。それでも、手書きで応募書類を書くということに重きが置かれる習慣があり、それが応募者のプレゼンテーションの一環と見なされる限りは、時間をかけて失敗を重ねながら書くほかはない。コミュニケーションに関しては、アスペルガー症候群をはじめとする自閉圏の発達障害者にとって、行間を読んだり言外の意図を察知したりすることが難しいということに立脚して、「物をはっきり言う」アメリカのほうが、英語という外国語でのコミュニケーションの不自由さを差し引いても、すれ違いが少なかったという。

先述のとおり、B さんは PDD-NOS という診断を受け、その後病院に通ううちに診断名が学習障害へと変わっている。彼自身、その診断を受けてから診断名を大学に伝えて、試験における特別配慮を求めたり、就職活動に向けて障害者手帳の取得などさまざまな選択肢を検討したりと、病院で受けた診断に基づいて制度面でのさまざまなリソースを活用しようとしている。そうした意味においては、医学的な診断の持つ信頼性と社会的な正当性を受け入れているが、同時に上のような「文化の違い」による障害の表出の違いについても語っており、臨床的な見地とはまた異なるレベルで、発達障害という診断をめぐる「当事者」の側からの解釈と経験の開かれた可能性を示唆している。例えば上のインタビューの抜粋にある「アスペっぽさ」は、本人、あるいは（診断を下せるような立場にはない、非医療従事者である）周囲の人びとによって感じられるものであり、国境や文化圏を超えて広く精神科医によって用いられている医学的基準による診断とは異なる次元で流通する、発達障害「らしさ」をめぐる言説の存在を明らかにしている。しかも、こうした「らしさ」は環境や状況に応じて強く出たり弱く出たりする、ということをも、B さんはアメリカでの読み書き

の必要性やコミュニケーションスタイルを例に挙げながら語っている。このような「らしさ」の語りの中に、発達障害という概念を医学的な診断名からずらして解釈していく可能性がこめられているのではないだろうか。即ち、診断を受けていることと、「らしく」あることとは別であり、本人にとって辛いのは後者の「らしさ」を強く表出させざるを得ないような状況や環境下に置かれることではないだろうか。

「自分はアスペっぽいところもあって、子供のころの話でいうと、すぐ人にだまされるので友達によくからかわれたりとか、これがそばにないと寝れないっていう物があつたりとか。今もそうだけど、タートルネックみたいなチクチクする服が着れなかったり。友達の種類が偏っていたり。あと、授業中に鉛筆を最後まで削ったらどうなるかと思って、最後まで削ろうとして、しかも削りカスが途切れないようにするっていうルールまで作って。(笑)それで夢中になってやって後ろから先生にこづかれたんです。(笑)あと、外の風景をずっと見てたり。忘れ物もすごく多かった。ランドセルの中にいつも図鑑が入ってたし、時間があれば開いて見てたんだと思います。」

自分には(診断を得ている)学習障害だけでなくアスペルガー症候群の傾向もあると思う、ということていくつかそう考える理由を挙げているが、「すぐ人にだまされるので友達によくからかわれる」とは、人の話を字義通りに受けとめ、冗談などを行間から判断することが苦手であるということを示しており、「チクチクする服が着れない」というのは感覚過敏があつて洋服の素材感やタグの感触などが非常に気になるということを示している。また、図鑑を眺めるということや、鉛筆削りの一人遊びも、特定の物の収集・分類・秩序立ててに対してこだわりがあつたということを示唆している。これらはいずれもアスペルガー症候群の臨床的な特徴に基づ

いており、Bさんはこれらを列挙することによって自身の「アスペっぽさ」を描写している。医学的な診断を受けてはいないため、Bさんが確かにアスペルガー症候群であるとは言い切れない。しかし、診断とは別のレベルでの、本人による「らしさ」の標榜は、発達障害というメタファーによってしか表現されえない生きづらさの語りなのではないだろうか。

ケース 3: カミングアウトをめぐる葛藤 (Cさん・30代・女性)

「化粧品の販売の仕事についていたとき、上司がすごく厳しい人だったんです。自分は仕事ができなくて、たとえば棚を掃除するために商品を一度棚から下ろすと、元に戻すときに順序を忘れちゃって、それから、両替で『1000円札を何枚、500円玉を何個…』とか言われても覚えられなくて、全部書き取っていたんです。そしたら店長が『それ、覚えられないの?』って、『苦手なんです』って答えたら、『苦手ってことは努力すればできるってことだよ』って…。結局、『苦手』って言い方をするとそう言い返されちゃう。苦手と障害の境界って難しい。その職場はクビになって、そのときに仕事ができないよね、みたいなことをいわれたので、実はこういう障害なんです、ってカミングアウトしたら、なんで最初に言わなかったのって。でも障害のない人と同じ給料もらってるわけだから、そんなことカミングアウトしても何の意味もないですよ。」

これは、Cさんという女性のインタビューからの一節である。30代になってから発達障害、中でも短期記憶障害があるという診断を得た。それ以前から職を転々としていたが、診断を得たのちもパートや派遣社員としてさまざまな仕事を経験し、仕事ができないという理由で何度も解雇されてきた。「そんなこと（障害があるということ）カミングアウトしても何の意味もない」ことの背景には、発達障害がそれだけでは障害者手帳の交付要件を満たさないために、障害者枠での就労がかなわず、雇用主に告知しようがしまいが通常の枠での雇用以外の選択肢がないという制度的な課

題があるのだが、このエピソードはそうした制度に対する批判にとどまらない、「障害の理解」をめぐる根源的な問題提起を含んでいる。同じ給料をもらっているのなら、皆同じことができなければならず、その水準に達することが本人にとって難しいのであれば、「努力」を以ってその困難を克服すべきだということを、店長の言葉は暗に示している。「苦手である」ということは一定の理解を得られるが、「努力すること」の免罪符にはならない。しかし、「障害がある」といったとたんに状況は一転し、それなら話は別、とでもいうように一般の評価と期待の基準からはずされてしまう。これは、「苦手」と「障害」を地続きのものと捉えている彼女から見るとダブルスタンダードに他ならないのだろう。実は障害者手帳は、発達障害のみでは取得できないが、うつなど二次的な症状が顕著である場合にはそちらのほうで精神保健福祉手帳をとる等の手段があり、発達障害者がほかの事由で障害者手帳を取得する例は多い。彼女も、就労に役立つからと病院でそうすることを勧められたそうだが、今のところ取得していない。

「手帳があれば障害者枠で働けるけど、自分のプライドとして普通の人と同じように働けているということに意味があるんです。やっぱり手帳を出して障害者として働かせてもらうのはちがう気がするし、それは最後の手段っていうか。どうにもならなくなったらそうしようかなと。それまでは自分の力でがんばろうと。偏見かもしれないけれども。」

Cさんが語ってくれたさまざまなエピソードの中に一貫して存在していたのは、「障害者」というラベルとの関わり方についての問題意識であった。もう少し端的に言えば、それは発達障害者であるということを職場や家族などの周囲の人にカミングアウトすることをめぐる葛藤の問題であり、周囲に理解してほしいという思いと、「障害者」というラベルを引き

受けることに伴う違和感との間での気持ちの揺れが、Cさんの話の要所要所に読み取れる。「普通の人と同じように働ける」ことと、「障害者として働かせてもらう」こと、この二つの表現の違いの中には、どのような思いがこめられているのだろうか。

「五年前に、『片づけられない女たち』を読んで、自分のことじゃないかと思って、診断を受けられるような病院をインターネットで探して行ったんです。そのとき、最初は先生に『あなたは（発達障害とは）ちがうと思う。こうやって普通に話もできてるし。』って言われて、でも念のためにテストしますかって言われ、『ああやっぱりそうだね』ってなった。IQとかもすごく低かったし。診断が下りたときは、名前をもらったという点で、これまで自分が仕事をちゃんとできずに転々としてきたことを、自分でゆるしてあげようという気持ちになった。（中略）今は仕事のこととかを先生に聞いてもらって、別にそんなにアドバイスがもらえるわけでもないけど、聞いてもらえるだけで多少は楽になるんです。（中略）病院ではデイケアとナイトケアというのがあって、発達障害をもった人たちが集まって話をしたりするんだけど、ほとんどはアスペの人たちでSST²をやったりしてて、自分にはあまりあてはまらないなあと思いながら見えます。自分と同じような、短期記憶障害だけの人は会ったことないです。アスペの人は、障害だとはわかっているけど、言われたことにムツとしてしまったりとかします。わかっているんだけど、なかなか、仲良くなれたりすることはないですね。」

診断を受けたことに関するCさんの語りには、それを肯定的に受け止める面がありながらも、どこか割り切れないような感情も同居しているよ

² 「ソーシャルスキルトレーニング」の略。社会性を身につけるための、ロールプレイングなどを含むトレーニング手法。

うに思われる。これまでさまざまな仕事につきながらもなかなか続かなかったことについて自分を責めていたものの、診断を得たことで、自分の努力不足だけでは補えない部分があったということを受け止め、「自分をゆるしてあげようという気持ちになった」としている。つまり、診断を得たことでこれまでの失敗や挫折に伴ってきた自責の念が緩和されているが、その一方で、定期的に病院に通って話を聞いてもらうという以外の具体的な手立てには結びついていない。また、後述するがCさんは家族やごく親しい友人を除いては発達障害があることを打ち明けておらず、職場でも伏せているため、診断を得たことによる社会生活上の具体的なインパクトはほとんどなく、あくまでもCさん自身の気持ちを軽減しているだけである。また、ほかの発達障害者との経験の共有感や連帯感も希薄であることが、病院のデイケア・ナイトケアでのアスペルガー-症候群を持つ発達障害者とのかかわりのエピソードを通して伺われる。「言われたことにムッとしてしまう」とあるのは、アスペルガー-症候群を持つ人が往々にして社交辞令に無頓着で、相手との関係性や距離感を鑑みることが苦手であり、伝えることが失礼になってしまうような事柄でも臆せずに口にしたりすることについて、気分を害したり腹立たしく感じたりしてしまうということである。アスペルガー-のこうした障害特性についてはさまざまな一般向けの発達障害関連の啓発用出版物などで解説されているが、Cさんの「ムッとしてしまう」という言葉は、「発達障害者」とひとくくりにされている人々が実際には多様な障害を持っていること、そしてそうした多様性を超えて相互に理解しあうことは、発達障害者とそうでない人との間の理解と同様に困難であることを示唆している。Cさんはまた、「短期記憶障害だけの人には会ったことがない」と語っているが、これは学習障害(LD)などで読字障害と短期記憶障害を併せ持っている人などには出会っているものの、短期記憶障害のみで他には何もない、といった人には出会ったことがない、ということである。発達障害と一言で言っても、日常生活の中

のどういった面で大変さがあるのかは人それぞれであり、その多様性ゆえに、同じ「発達障害者」という大きな括りの中で経験を共有しようとすることはできないし、診断を得たことで同じ経験を持つ「仲間」ができるわけではない。診断を受けた時期についてのCさんの語りからは、今後どのように発達障害という「名前」とつきあっていけば良いのか、という困惑が伺える。

「大学のころは天然っぽいって言われたけど、これが自分なんだと思ってそれなりに居心地がよかった。ただ、学校にいる間は個性っていうことで済むけど、社会に出るとちがいますよね。仕事が定まらず、ずっとバイトや派遣をやっているものの、クビになったりしてかなり仕事を転々としていて、履歴書には書ききれないほどで。そんな自分を心配してくれる友達もいて、近い人には（発達障害があるということを）カミングアウトしてるんです。一人、大学時代の友人で福祉の仕事をしていて、児童相談所の相談員をしている人がいて、その人が細かくいろいろなことを聞いてきて、『家にお金をいれてるのか』『将来のビジョンはあるのか』とかうるさいので、カミングアウトしました。そうしたら、信頼して言ったんだと思われて『教えてくれてありがとう』って言われた。職業柄、発達障害のことも知ってたんです。でも、そこで『あなたを信頼して言ったのではなく、あなたの詮索がうるさいから言ったんだよ』『あなたは職業柄、私が仕事を転々としてることを話すときにへこんでいることを、察するべきじゃないの?』って責めたことで、ちょっと関係が悪くなっちゃったんです。今は表面的には仲直りしてるけど、（中略）人とのコミュニケーションについては実はすごく気をつけてるんです。自分が相手をわかっているつもりでも、本当は全然わかっていないかもしれない、誤解しているかもしれない、っていうことを考えてるんです。」

これはCさんが行った友人に対するカミングアウトのエピソードである。自分のことをわかってほしくて伝えたというよりは、おせっかいとも感じられるような詮索に辟易して話した、という状況が説明されているが、発達障害があると伝えることでそうした詮索を一蹴できると考えたCさんと、それを友情と信頼の証と捉えた友人との間の温度差が印象的である。最後の、コミュニケーションに関する箇所は、Cさん自身が気を遣っているとあるが、同時に周囲の人は自分に対して同じように気を遣ってほしいということなのだろう。「相手をわかっているつもりでも、本当は全然わかっていないかもしれない」とあるが、職を転々としていて将来のビジョンもないかのように見えても、その内実どのような思いを本人が抱えているかはわからないし、またCさんの発達障害のように伝えられていない事実があるのかもしれない。相手のことを「わかっていないかもしれない」前提に立って、できる限りその人の気持ちを察して寄り添う、ということこそ、Cさんが他者に求めていることであり、カミングアウトをするのか、しないのかという苦しい二者択一に帰結するような人間関係のひずみを回避する方法なのかもしれない。

「(発達障害の診断を受けたということ) 兄には言いました。兄はすごく頭のいい人で、理系で、『医者は何でもカテゴリーにあてはめて名前をつけてるんだ。どうして、できないことを単に『苦手』って考えられなかったんだ』って言われたんです。(しばらく声を殺して泣く) …母親にはずっといえないと思っていたけれど、今年に入って喧嘩したときに思わずカミングアウトしちゃいました。四年間も黙ってたのに。母はショックを受けてました。3か月間ぐらいは、子供のころ、近所に知的障害の子供がいて、一緒に遊んだりしていたんだけど、その子が大きい置時計を私に向かって投げきて、すれすれで頭にぶつかりそうになったことがあって、そのことを話すと、親はやっぱ知的障害に対して偏見があるみた

いな言い方をして、『あなたは五体満足で生まれてきたからよかった』っていうようなことを言ってたんです。だからすごくショックだったと思う。診断を受けるときに母子手帳を見せてもらう必要があっけ出してもらったりしたから、『何かあるんだろうとは思ってたけど』って言ってました。自分は高校から私立でお金もかけてもらって、好きなように育ててもらったのに、本当に申し訳なく思って…。(再び涙声に)

上のインタビュー中でCさんは二度泣いている。一度目は、兄がCさんの障害を「医者はなんでもカテゴリーにあてはめたがる」と一蹴し、障害というよりは「苦手」の範疇だと考えるべきだと主張する場面である。二度目は、母親にカミングアウトした際、母親の「障害」に対する「偏見」を慮って、娘である自分が障害を持っているということをごどのように感じているのかを想像し、「申し訳なく思って」泣いている。すなわち、前者においてはAさんが障害を持っているという事実が兄によって否認されており、後者においては母親がそれを困惑しつつも受け止めているが、いずれの場合についてもAさんは心苦しさを感じている。兄の主張に対しては、前述の化粧品会社での就労時のエピソードにもあった通り、Cさんは「苦手」と「障害」との間にある溝を意識しつつ、大きな葛藤を抱えながら働いていたため、兄弟にそのような指摘を受けることは大きな苦痛を伴うものであったことは想像に難くない。Cさんにとっては、できないことを自身の中で「苦手」と捉えられるかどうかという問題ではなく、それが努力で克服できるような苦手さではないことを隠して、周囲に対して自身を偽りながら働いていくことにこそ、苦しさがあつたのである。一方、母親へのカミングアウトに関しては、ショックを受けた母親の心情と、Cさんの「申し訳なさ」との背景には、二人の親子関係の外に広がる社会の規範と、障害をめぐる通念の重みが見え隠れする。子供のころ近所に住んでいたという知的障害児が「障害者」を体現する存在として描

かれているが、その子どもに対する母親の態度を偏見であるかもしれないと断ったうえで、Cさんはしかしそれを批判することなく、母親の気持ちに寄り添っている。「偏見」は、母親の個人的な気持ちの問題に留まらず、母親自身をもその偏見の矛先にしかねないような社会通念と連続しているものであり、Cさんが母親へのカミングアウトの際に感じているやりきれなさは、最終的にはそこにつながっているのだと感じさせる。兄と母、二人の対応とそれぞれに対するCさんの思いには、「障害」という概念の持つスティグマに対する二つの向き合い方が示されている。カミングアウトをめぐる葛藤とは、発達障害者であるという本人の属性そのものに起因しているのではなく、それを伝え、その情報が共有されることで生起するスティグマと再構成される関係性に起因しているといえるのではないだろうか。

Cさんはその後、派遣会社に登録して「電話対応は苦手、マルチタスクも難しいので、そういうことのない仕事を紹介してほしい」と依頼して、別の仕事に就いた。彼女は障害に起因する特性を「苦手」と主張し続け、それに伴う「努力が足りない」という批判を時には受けとめ、時にはかわしながら仕事を続けている。しかし一方で、「いつばれるか不安。いつ、『単なるおっちょこちょいではないよね?』っていわれるか…」とも話しており、障害があるという事実をひた隠しにすることの苦しさをも語っている。

Cさんの語りの中に見られる、カミングアウトをめぐる葛藤は、障害受容という彼女自身の意識の問題である以前に、やはり、現代の日本社会における「障害者」像との距離の取り方をめぐる問いであると考えられる。発達障害が近年少しずつ知られるようになってきたとはいえ、職場で指示を覚えたりすることに困難があるときに、ただちに周囲が「発達障害があるのではないか」と気づいてくれるほど浸透しているわけではない。本人が言わなければ、「苦手」「不得意」で通してしまうこともできるが、頑張

りが足りないと言われてしまうと辛く、かといって「障害者です」と伝えることによって引き受けることになる障害者像には違和感がある…といった状況の中では、いったいどのような選択肢が残されているのだろうか。

考 察

本稿にはじめにも述べたように、一見すると発達障害者による語りは概して、きわめて個人的で非政治的であるかのように見える。それはいわゆる「当事者本」として出版されているものにおいてもそうであるし、また本稿で取り上げたような個別の聞き取り調査においても、そうした色彩が顕著である。彼らの語りは、社会と対峙して自立と復権のために連帯し闘うというような姿勢を持たない、きわめて主観的で内省的な語りであり、これまでの障害者運動に見られるような、さまざまな課題を孕みつつも連帯と変革を志向する集会的な主体としての「当事者」意識は希薄である。

しかしその実、彼らの語りの中に描かれている、日常生活の生きづらさを改善するための個人的な努力や葛藤、解釈や工夫などは、それらを要請している、より大局的な社会の在り様と連続しており、その関係性から目を背けることはできないということを、本稿で取り上げた三名のインタビューからは読み取ることができる。

一つ目のケースの A さんは、仕事ができない、勉強ができないといった「できなさ」に起因する自己否定的な気持ちに押しつぶされそうになっていたが、技能的な意味でできないということと、そのできなさが持つ社会的な意味とを切り離して考えることでそれを乗り切ろうとしていた。辛いものが食べられないという「できなさ」が些末なことであるのに対して、商品番号が入力できないことの「できなさ」がそれほど重大なことである必然性がどこにあるのだろうか。自身の発達障害と前向きに付き合っていくためのストラテジーとしての発想の転換だが、同時にまた、社会が特定の技能に課す価値の恣意性に対する問題提起であるとも受け取ること

ができる。

二つ目のケースのBさんは、日米の異なる教育環境の中で小中学校時代を送った経験から、文化の違いと支援制度の違いが、どれほど発達障害を持つ本人の経験を左右するものであるかを明らかにしている。医学的な診断名だけでは捉えきれない経験の幅を、「らしさ」という概念で描き出し、アメリカにいたときと比べて日本にいるときのほうがより「発達障害者らしい」特性を自身に感じるということの背景に、そうした側面を炙り出しやすい日本の文化と制度に対する批判を垣間見せている。

三つ目のケースのCさんは、家族や友人、職場の上司に対して発達障害があることをカミングアウトしたときのエピソードを中心に、自身の内なる葛藤を吐露しているが、彼女の語りはカミングアウトをする相手と自身との直接的かつ個人的なやりとりに終始していながらも、障害者をめぐる外在的なスティグマや社会通念がいかにしてその対話を形づくっているかを強く意識させている点で、社会における障害者のイメージをめぐる普遍的な問題提起を含んでいるといえる。

このように三者のインタビューの内容を概観してみると、発達障害者の語りが個人的で内省的であるように見えて、常により大局的な社会の在り様を意識しつつ、不確かな自身の立ち位置を確立するために紡がれている言葉であることがわかる。これまでの障害者運動を先導してきた人々が社会を相手に繰り広げた闘争は、発達障害においては当事者の内なる葛藤へと形を変えているとみることができるのではないだろうか。連帯して外へ向かう当事者性ではなく、個人として社会との関わり方を模索する当事者性へ。このように捉えると、発達障害者の語りは、社会の規範的な要請に対して違和感を感じ、あるいは適応できずにいるあらゆる人々の語りとは緩やかにつながっており、この社会を形成している私たち一人ひとりを、広い意味での当事者性の輪の中に取り込んでいく可能性を秘めているのではないだろうか。

文 献

- 綾屋紗月，熊谷晋一郎 2008『発達障害当事者研究—ゆっくりていねいにつながりたい』，医学書院
- 磯部潮 2005『発達障害かもしれない，見た目はふつうの，ちょっと変わった子』，光文社
- 高森明，木下千紗子，南雲明彦，高橋今日子，橙山緑，片岡麻実，鈴木大知，アハメッド敦子 2008『私たち，発達障害と生きてます—出会い，そして再生へ』，ぶどう社
- 杉山登志郎 2009『講座 子どもの診療科』，講談社
- 中西正司，上野千鶴子 2003『当事者主権』，岩波新書
- ニキリンコ，藤家寛子 2004『自閉っ子，こういう風にできてます！』，花風社
- 杉野昭博 2007『障害学—理論形成と射程』，東京大学出版会
- 豊田正弘 1998「当事者幻想論（あるいはマイノリティの運動における共同幻想の論理）」，『現代思想』1998年2月号，青土社